

東京大空襲を逃れ、苦学しながら鉄工所で働き、ゼロから身を興した戦後の混乱期。父である先代との確執と和解、裸一貫で仕事を探した苦難の時代…波瀾万丈の創業期を経て、関鉄工所は今年、創業50周年を迎えました。10月に社長を3代目に譲り、自らは会長となった関恒雄氏にお話をうかがいました。

戦後日本を担った 職人魂を受け継ぎたい 「ゼロから築き上げた鉄工所」

株式会社関鉄工所
代表取締役会長

関
恒雄



何度も生死の境を彷徨ったという関会長。機械の事故で大ケガをして緊急手術、医師からも見放され、集中治療室から霊安室へ運ばれる途中で息を吹き返し、生還したことも。また車で海に転落しても、自力で脱出して助かった経験が。「何度も死にかけているから、もう当分長生きするでしょう」と笑う。

せき・つねお／1936(昭和11)年、東京・亀戸出身。本所工業高校の夜間部へ通いながら溶接工場などで働いたのち、富士フィルム研究室に入社。父親が営む鉄工所から独立し、1965(昭和40)年、現在の地で鉄工所を興す。今年4月10日に創立50周年を迎え、10月より社長を息子・秀彦氏に譲り、会長職に。

<DATA>

千葉市花見川区作新台4-11-1

☎043 (259) 5201

事業内容：各種産業用機械の部品加工（ターニングマシンによる大型機械部品加工、特に高硬度材の大型産業用機械部品の切削加工に精通）

よそが嫌がる仕事を受け、寝ずに働いた創生期

焼け跡で苦学した少年時代

私は東京・亀戸の生まれ。父は戦時中、中島飛行機で零戦の設計者でした。1945(昭和20)年、東京大空襲で奇跡的に生き残ったものの家族は散り散りになりました。

戦後、父は富士重工の新潟工場長をまかされましたが、工場閉鎖によって東京に戻り、1952(昭和27)年、退職金代わりに譲り受けた機械を仕事仲間と持ち寄って、亀戸で工場を借りたのが関鉄工所の原点です。

私は中学卒業後、錦糸町の本所工業高校設計科の夜間部に通いました。父の鉄工所の片隅で寝起きし、早朝から溶接工場で働いて夕方から学校へ行く。とにかく毎日その日を生きるか、死ぬか。戦後復興で周りがどんどん豊かになってくるのにうちは余裕がなくて、本当に苦しい時代でした。

就職、そして父の鉄工所から独立

卒業後は有楽町にあった富士フィルムの研究室に就職し、オフセット印刷機を作る仕事に就きました。2年程して、父の鉄工所が少しずつ軌道に乗りました。会社が父の鉄工所に部品加工の仕事を発注してくれました。しかし図面通りの精密な品を作れず、もともと設備投資しないと事業として成り立たないと何度も進言しましたが、父は借金嫌い。押し問答が続きました。



結果的に私が鉄工所を飛び出し、ここ作新台で独立したのが1965(昭和40)年。もちろん資金はゼロで、500坪の工場20年ローンの保証人には、父の知己だった方に「父から頼まれて」と嘘をつき、判子を押してもらいました。

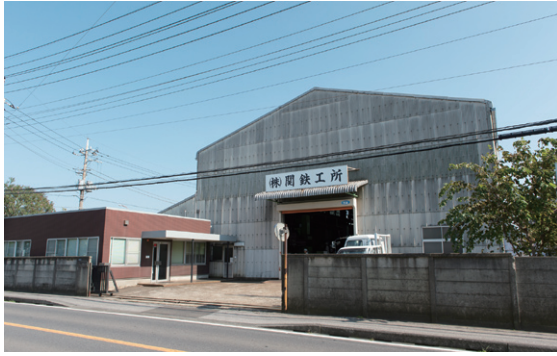
ついに川鉄から初受注

最初は毎日やることなく、何か仕事がもらえそうな川崎製鉄まで毎朝、自転車を通っ



IHI、日立製作所、明電舎、荏原製作所、富士電機…名立たる大企業との直接取引が長年続いているのも、「納期はどんなことがあっても遅らせない。約束は必ず守ってきたから」という関会長。

て門前払いが続きました。ある時、敷地内の木製のどぶ板の修理を申し出て、短期間で直したんです。修理代金は7万2千円と完璧な赤字でしたが、仕事が取れたのが本当に嬉しかった。続いて、鉄の強度を調べるテストピースを受注しました。川鉄の工場に運んできて、夜のうちに機械加工をして、翌朝トラックで納めに行く。人が嫌がって断る仕事を、喜んで受けました。昼間も、ちゃんと寝たことなんてなかったですよ。布団に入って眠るなんて、ほとんどしなかったですね。



「創業当時、仕事も収入も全然なかった頃にこの辺りは一面の畑が広がっていて、食べるものは近所の農家からもらえたんですよ」と関会長。



平成27年4月10日、創立50周年記念祝賀会。オーダーメイドで作った赤いネクタイは団結の証。

「できない」とは絶対に言わない。やるんです。

ゼロから這い上がった 職人魂

「難しい」「納期がない」「予算がない」。急ぎなら夜中でもやります、難しい仕事なら挑戦します、予算は合わせます：人がやらない仕事を、歯を食いしばりながらどんどん受けて、仕事が増えていきました。

「できない」とは絶対に言わ

ない。やるんです。まず受けてから、どうするか考える。苦しい時に脱皮するにはそれしかない。当時は特に、高硬度材の研究や加工にずいぶん苦心しました。うちにある機械でできなければ、手で削ってでもやってやるという気持ちで、とにかく機械をやりくりしました。工夫を重ね、少しずつ評価されて、あれもこれもと頼まれるようになっていきました。

先代との和解、 そして別れ

仕事に軌道に乗ってきた

関会長 Q&A

Q 朝の習慣は？

A 朝は6時起床。今日も無事で働けるようにと仏壇の父に手を合わせ、7時半に家を出て、工場へ。

Q 愛読紙・愛読書は？

A 日経新聞と日本工業新聞。読書は乱読で、月刊誌「トップポイント」のランキングは毎月チェック。

Q 仕事以外でハマっていることは？

A 仕事以外なし！ 休日もほとんど工場に来て仕事をしています。

Q カラオケの十八番は？

A 何でも歌うけど、「花」や「ふるさと」のような叙情歌や唱歌が好き。心の故郷だね。

Q 座右の銘は？

A 全てに対し「何事も誠心誠意」。父が亡くなる前日の絶筆「開魂（かいこん）」も、大切にしている言葉。

Q とっておきのストレス解消法は？

A ストレスは耐えるものでも、逃げるものでもない、乗り越えるもの。ストレスがあるからこそ自分の存在価値がある。

1971（昭和46）年の暮れ、父を迎える覚悟ができました。それまで物置同然だった2階建ての住まいをリフォームし、工場を見てもらったんです。初めて連れてきた日、父は驚き、喜んでくれました。代わりに古い工場を処分し、新しい機械の導入資金にしたいという申し出も、しぶしぶ了解してくれました。

転、手狭になった工場を建て直しました。借金の返済の目処もついて、応援してくれる方々もできました。この仕事でやっていける、とようやく自信がついたのもこの頃でした。

職人魂を 引き継ぎたい

今年10月1日に息子が社長となり、私は会長職となりました。今まさに経営者としてバトンタッチしているところですが、我々の働き方を今の若い世代に押しつけても無理でしょう。しかし真似できないなりに理解させていくこと



経営を引き継いで1カ月（取材時）の関秀彦社長（入社17年・44歳）。父と子で、次の50年に向けた関鉄工所の新たな歩みが始まっている。